



ポエムーちゃん④／おくはらゆめ 2
わたしの原風景④／ひろかわさえこ 3
目を凝らして見える世界、見えないものから見える世界／小貫良行 4
新刊紹介『ちいさなショベルカー ベルン』 6
新刊紹介／代田知子、望月美穂 7
イラスト／平岡 瞳



『さがしています』スペイン語版が刊行されて 宇野和美

戦後80年を迎えた2025年の6月、広島原爆で遺されたものたちが語りかける絵本『さがしています』（アーサー・ピナード／作、岡倉禎志／写真、童心社）のスペイン語版が、『La espera』というタイトルでスペインで刊行されました。私の本業はスペイン語の翻訳ですが、折あるごとに、海外では作られそうにない日本の児童書を、スペイン語圏の信頼のおける編集者に紹介しています。『さがしています』は2012年に会って以来、メキシコでもコロンビアでもアルゼンチンでも、翻訳出版の期待をこめて手渡してきた本だったので、10年越しの出版実現は夢のようにうれしいことでした。

版元のカランドラカ社は、1998年にスペイン北西部の町ポンテベドラで創業し、多言語の絵本出版に取り組んでいる、スペイン語圏ではよく知られた良心的な出版社です。私が社長のバリエステロスさんとの面識を得たのは2023年秋のことでした。その2か月後にブックフェアで再会したとき、『さがしています』を手渡したのが今回の出版につながりました。同社はこれまでに『なぜ あらそうの？』や『ローズ・ブランチュ』など、戦争や平和について考える絵本を出版してきたので、この本を見てすぐに、自分たちのラインナップに加えるべきだと思ったとのことでした。

昨年10月9日には、私の出張に合わせて、マドリードのカサ・アジアという国営施設で『La espera』の刊行発表会が開催されました。国際交流基金（出版助成をいただきました）の武田康孝氏のご挨拶に始まり、9月に録画した、作者であるアーサーさんの字幕つきビデオを流しました。原爆を正しいものと教わってアメリカで育ち、日本に来てそうではなかったことに気づき、ものを通して、原爆で命を落とした方々の声に耳を傾けたという言葉に、来場者は強く胸を打たれたようでした。続いて私、マドリード自治大学名誉教授の高木香世子さん、バリエステロスさんが、それぞれにこの本への思いを語りました。最後に、時計、日記帳、人影の石のページをスライドで映しながら日本語、スペイン語で朗読し、満場の拍手に包まれました。原爆についてよく知らない来場者も多かったようですが、写真と語りによって、大切なことが時と場所を越えて伝わることを実感でき、出版に関われたことを改めて幸せに思いました。

この本が、日本でもスペイン語圏でも長く読みつがれることを切に願っています。 （うの かずみ／翻訳家・JBBY会長）

*『なぜ あらそうの？』（作／ニコライ・ポポフ、BL出版）

『ローズ・ブランチュ』（作／クリストフ・ガッラス、ロベルト・イノセンティ 絵／ロベルト・イノセンティ、平和のアトリエ）

おくはら ゆめ (絵本作家)

ホエむーちゃん

4

子どもの頃の、あだ名が ^{むー}夢ちゃんだったので、
子どもに戻ったような気持ちで詩を書いてみる。

いろいろ おに
わるい おに
いい おに
こわい おに
やさしい おに
いろいろ いるんだって
ぼくと にてる おに
いるかしら
いっしょに あそんで
くれるかしら



はるのおと

ぱらぽれ ひれはれ

はるのおと

はれた くうきに まるつてる

ぱらぽれ ひれはれ

はるのおと

つちの なかにも ひびいてる





わたしの原風景

48

ひろかわさえこ

絵本作家

目が覚めると縁側に面した障子の白がいつもより明るかった。家族はまだみんな寝ている。家の中が、しーんと静まっている。いや、家の中だけではない。早朝から庭のナナカマドに来る鳥のさえずりも、車の音も聞こえない。

布団を頭からかぶったまま、そっと雪見障子を滑らせて外をのぞく。「あ……」

縁側のガラス戸の向こうには、待ちに待った景色が広がっていた。夜じゅう休みなく降り積もった雪が、昨日までの枯れ色の庭を真っ白に変えてしまった。すっぽり雪をかぶった庭木は、思わぬ形に変身していて、生きもののよう。のっそりのっそり動き出しそうだった。

そういえば、夕方降り出した大粒の雪を眺めて「そろそろ根雪になるんでない?」と、ため息混じりに母が言っていた。春までとけない雪を根雪と言う。十二月から三か月、北海道の特に日本海側にある小樽の町は雪に閉じ込められる。私が子どもの頃は、今よりもっと雪が多かったような記憶があるが、私が小さかったからだろうか? その朝の美しい景色も、大人たちにとっては毎日の雪かきや、屋根の雪下ろしの日々の始まりで、ため息もつきなくなったのだろう。今なら、よくわかる。だけど、子どもたちはワクワクする。スキーに櫓に雪合戦、冬の遊びが待っている! 姉たちと、何日もかけて雪の壁を積み上げて、小さなお城づくりに励んだ。窓には、家の軒先にできた太いつららを刺して窓枠にする。北海道のパウダースノウでは、屋根は作れないから、納屋から藁を持ってきてかぶせる。子ども三人で満員のお城の出来上がりだ。毛糸の手袋には雪の塊がごろごろこびりついて凍っているけど、そんなことも忘れて遊んでいた。

やがて母が呼びにきて家に入ると、薪ストーブを囲んで、足先を並べる。温まった足の指のしもやけがむずむずかゆくなってくる。思い出せば、それはとても寒くて冷たくて、でもからだの底からあったかい雪の日々だったと思う。なんと七十年近くも前のお話。

目を凝らして 見える世界、 見えないものから 見える世界

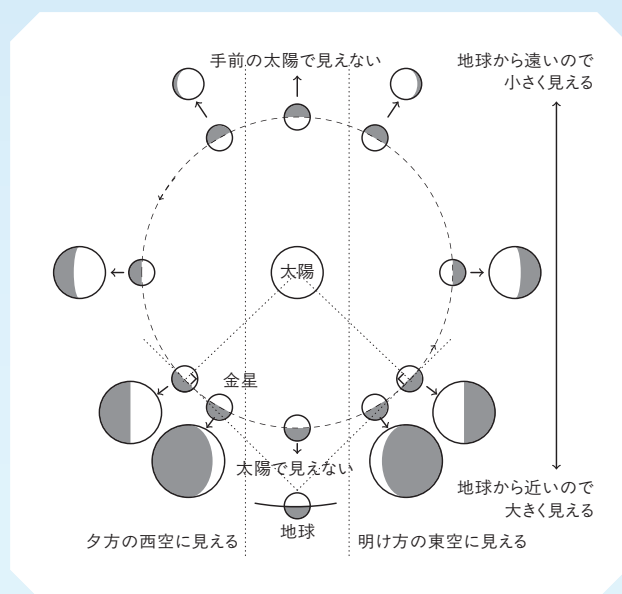
冬は空気が澄んで天体観望にぴったりの季節です。
宇宙にも深い関わりをもつ素粒子^{そりゅうし}の実験物理学者で、
子どもたちに星や科学のおもしろさを
伝える活動をしている
小貫良行さんにお話をうかがいました。

小貫良行

(素粒子実験物理学者)

おぬき よしゆき 博士(理学)。東京大学素粒子物理国際研究センター助教。専門は素粒子物理学実験。茨城県つくば市の高エネルギー加速器研究機構での国際共同素粒子物理実験^{国際共同素粒子物理実験}の二および暗黒物質探索実験などを推進。研究のかたわら、子どもたちの科学教室などでアウトリーチ活動も行つ。

図1. 地球と金星の位置関係。



金星の影

陽が沈んだ後の西の空、陽がのぼる前の東の空にとても明るい星を見たことがある人は多いと思います。この星は、太陽、月の次に明るく輝く金星です。明け方か、夕方のどちらか一方の空にだけ、それぞれ五か月間くらい見ることが出来ます。金星は地球とともに太陽の周りを回る惑星の一つです。太陽のように自ら光を放つのではなく、太陽の光を反射して光っています。地球よりも内側を回っているため、真夜中には見えず、明け方、夕方のどちらかにしか見えません(図1)。

この金星の光が地表に影を作るのです。太陽を背にするとももちろん自分の影が見えます。同様に月でできた影を見たことがあると思います。同じことが金星でも起こると知っている人は、星好きでもかなり少ないです。私がこのことに気づいたのは、小学校高学年の頃でした。ハレー彗星や藤井旭さんの著作で宇宙にとりつかれてしまった私は、住居の灯りが消え、星がよく見える夜明け前にたびたび起きて、双眼鏡で星座をたどっていました。さすがに外に出るわけにはいかず、家の二階の物干場で見ていました。

そんな冬のある日、最大光度になる金星を見ようと、また空が白む前に早起き

し、街灯をものともせずギラギラと輝く金星を見つけました。ペランダの反対側に回って街灯の影響のない暗い西の空を双眼鏡で眺め、見える範囲の星座をたどってまた金星に戻る、を繰り返すたびに金星は徐々に高くなる、やがて東の空も赤く染まるようになりました。星の数が増え、やがて東の空に金星だけが残ったとき、家の前の街灯がパッと消えました。もう寝るかな、と振り返り、双眼鏡を片づけていると家の白い壁に動くものが見えました。それが自分の影であることに気がつき、手を壁に近づけたり、遠ざけたりしていましたが、影を作る光の方向に金星があることに気づいたとき、驚きで声をあげたことを覚えています。街灯がない頃の昔の人々には、金星の影は当たり前だったはずで、それを私が再発見したにすぎないのですが、宇宙の秘密を垣間見た気がしました。

そらし目

望遠鏡でも裸眼でも、暗い星や、彗星などの暗い天体の微かな光を見るときに、ちょっとしたテクニクがあります。まず一つが、暗闇に身を置いて目をじゅうぶんに慣らすことです。望遠鏡の性能は倍率ではなく、光を集光するレンズや鏡

の大きさ（口径）で決まります。人間の目の場合は口径ではなく、瞳孔といいますが、瞳孔は暗い場所では大きく開き（最大で直径約7mm）、明るい場所では収縮します（直径約4mm）。暗い場所から明るい場所に移ると、瞳孔は瞬時に収縮しますが、その逆では瞳孔が開くのに数十分程度と長い時間を要するため、暗闇に身を置き、目を慣らす必要があります。もう一つが「そらし目」です。人間の網膜の中心には色を感じる錐体細胞が、周辺には明暗を感じる桿体細胞が分布しています。そのため、視野の中心より周辺の方が暗い光を感じやすい性質を持っています。そこで、見たいところを視野の周辺で見る「そらし目」を行うと、暗い天体が浮かび上がるのです。日常における「目をそらすな」や「もっとよく見ろ」は、暗い天体を見る場合は逆効果で、かえって見えにくくなってしまふのです。

見えないものを見る

私は幼い頃から星に関係する職業についてくことを夢見ていましたが、宇宙と関係の深い素粒子物理学の実験物理学者になることができました。また、星や科学に親しんでもらうことを目指して考案した

工作プラネタリウムキットが市販化されたことで、科学教室などにも呼ばれ、星にも関わっています（図2）。素粒子物理学は、「宇宙や私たちを形作る一番小さな構成要素『素粒子』とは何か？」を探究する物理分野です。どの物理分野も理論と実験があり、互いを検証して自然の深い理解を目指しています。現在、この宇宙には素粒子が十七個あることがわかっています。その中で、一番身近な素粒子といえば光（光子）と電子が挙げられます。網膜で感じる光は光子で、電子は例えばドアノブの静電気として、それぞれ実感できます。しかし、それ以外の素粒子を私たちは感じることはできません。

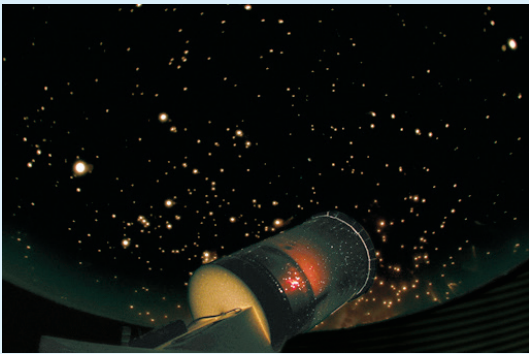


図2. 小貴さんが開発した工作プラネタリウムキットの投影の様子。株式会社湘南保育から工作プラネタリウム「エトワール」として販売されている。

ん。そこで実験では特殊なセンサーを使って検出します。残り十五個の見えない素粒子はこつして実験と理論から一つずつ存在が証明されたものです。素粒子物理学は現在から宇宙の開闢直後まで適用できる強力なものですが、宇宙の誕生や暗黒物質などについては説明できません。そのため、それらも全て説明できる「万物の理論」があると信じて、理論と実験の研究が進められています。

特殊なセンサーを必要とせずに、私たちは直接、網膜で天体の光を感じ、宇宙の姿を実感することができます。このことは、いつも特殊なセンサー越しに素粒子を見て宇宙をのぞいている私には、とても貴重に思えます。理科の教職免許を取ろうと考えている大学生であっても、その多くが望遠鏡で月や星を見たことがないのが現状です。天体観望においてもデジタル化の波が押し寄せており、「望遠鏡をカメラでのぞかせてスマホで見ろ」というスタイルが急速に普及しつつあります。ただ私は、大人が子どもたちに望遠鏡で星を見せて、「目を凝らし、ときに目をそらして感じたその天体の光は、何千、何万年の時間をかけて、たった今届いたものを見ているんだよー」というセリフを一回は言ってほしいなあ、と思うのです。

新刊紹介
『ちいさなショベルカー
ベルン』

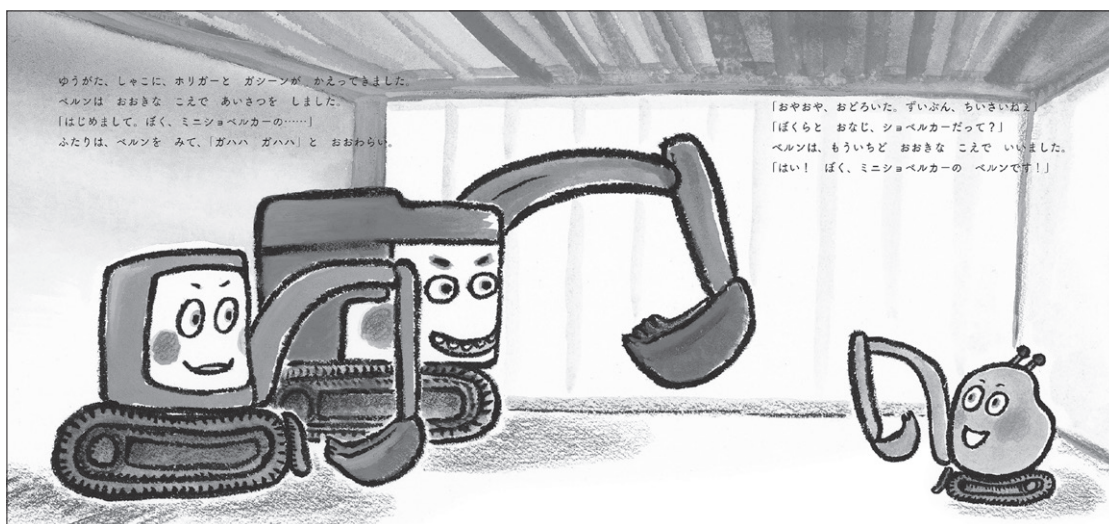
物語の世界からやってきたベルン

すとうあさえ (童話作家)

『ちいさなショベルカーベルン』のお話は十五年ほど前から温めていました。いよいよ絵本にしましょうというタイミングで、私はベルンと対面することになりました。それもお話と同じ設定で！ もうびっくりです。

私は七年前から目黒区にある駒場幼稚園の理事長を務めています。幼稚園に行くと二階のテラスから園庭を眺めます。子どもたちと先生たちが遊んでいる様子を見るのが好きなんです。一年中、庭には子どもたちが地面を掘って作る「こまば川」が流れています。そんなに広くない園庭には、ケヤキやイチヨウ、サクラ、カキ、夏ミカンなどが植えられていて、四季の移ろいを子どもたちに教えてくれます。

二年前、先生たちから、子どもたちがもっとのびのび走り回れる園庭にしたい！ という声がありました。鉄棒や雲梯などの遊具を整理して古い物置などを撤去すればスペースが広くなります。そこで、春休みに園庭工事をする事になりました。園にやってきたのは、個人住宅の水道工事や整地に使われるような小さなショベルカーでした。まさに、ベルン！ 動き出したら想像以上に力もちなんです。遊具を撤去した後、コンクリー



ゆうがた、しゃこに、ホリガーと ガシーンが、かえってきました。
ベルンは おおきな こで あいさつを しました。
「はじめまして。ぼく、ミニショベルカーの……」
ふたりは、ベルンを みて、「ガハハ ガハハ」と おおわらい。

「おやおや、おどろいた。ずいぶん、ちいさいねえ」
「ぼくらと おなじ、ショベルカーだって？」
ベルンは、もういちど おおきな こで いいました。
「はい！ ぼく、ミニショベルカーの ベルンです！」



ちいさなショベルカー ベルン

すとうあさえ／作 早川純子／絵
定価1,540円
(本体1,400円＋税10%)

幼稚園にやってきた ミニショベルカー



トの塊が土の中に残りました。遊具の軸を支えていたコンクリートでしょうか。その塊を小さいショベルカーが掘り起こし、土の中から持ち上げて外に出したのです。

すごい、かっこいい！ と思いました。

画家の早川さんと編集の西尾さんも園に取材に来てくださいました。早川さんのベルン、なんてかわいいのでしょう。そしてうれしいことに、絵本のなかに幼稚園の全景と、裏表紙には遊ぶ子どもたちの姿を描いてくださいました。

今回、実際に小さなショベルカーが力を発揮して園庭工事をする様子を見ることができました。小さいベルンだからこそできる仕事があるんだということを実感しました。うれしい出会いでした。幼稚園の庭は広くなり、子どもたちは元気にかまわっています。

ベルン、ありがとう。

BOOK

『くるん くるん』を一読し、赤ちゃんから楽しめる絵本だ！ と嬉しくなった。長年、ブックスタートや0、1歳のおはなし会で赤ちゃん和絵本を楽しんできた経験から、我ながら鼻が利くのだ。

まず、表紙がいい。きれいなピンク色のクレヨンの線で描かれた二重丸の真ん中に、つぶらな黒い目をしたカオがあって、笑顔でこっちをじっと見ている。赤ちゃんはカオが大好き。だから思わずじっと見返す。そこで、「くるん くるん」と調子をつけて読んであげれば、ほら、もう笑顔だ。表紙のカオが自分に向かって「くるん くるん」と話しかけていると思うのだろう。「なあに？」と、さらにじっと見てくる。

ページをめくると、1本の線が、「くくく くるん くる けろ」と言いながら、元気いっぱいいろいろな形を描いていく。場面ごとに線の色と形が変化して、「ぶー」「ぱおーん」とさけが新しいカオも現れる。2つの目が、しっかり読者の目を見る。ここが大事。特に0、1歳児を引きつけるには、この「アイコンタクト」と「楽しい音」が欠かせない。

主役は、くるんくるんと動きながらつぎつぎに新しい形を生み出していくく1本のクレヨンの線。次は何？ とわくわくする。クレヨンを握れる2、3歳なら、「ぼくもかく！」と言うだろう。自由奔放に動き回るクレヨンの気持ちになって、読み聞かせやお絵かきを、子どもと一緒に楽しもう！

(しろた ともこ／日本子どもの本研究会会長)



くるん くるん
中新井純子／作・絵
定価1,320円
(本体1,200円+税10%)

クレヨンくんのぐるんくるんに、
赤ちゃんも大よろこび

代田知子

愛らしい表情につられてにつこり！ 望月美穂



まいごのモリーは
おるすばん
こまつぶひさ／文
はたこうしろう／絵
定価1,540円
(本体1,400円+税10%)

モリーと初めて出会ったのは売場でした。「かわいい絵本きたっ！」と心の中でガッツポーズをしたのを覚えています。1作目が発売されたとき、アニメーションにならないかなぁと動くモリーに会いたくなり、2作目が発売されたときはシリーズ化に感謝しちゃいました。そして今回は待望の4作目。ページをめくるたびにくるくる変わるモリーの表情に、つい頬が緩んでしまいました。お家でおるすばんしているのにまいご!? 頭の中が

疑問符でいっぱいになりながら読み進めていくと、なんともかわいらしいオチ!! モリーに会ってぎゅって抱きしめたい!! モリーのあの「いっちょやってやろうか」みたいな表情がなんとも愛らしい!!

この「まいごのモリー」シリーズは、子どもたちにはドキドキ、ワクワクする気持ちを、親御さんたちには「あーある! うちの子、そういう顔する!」と思わせてくれます。そしてなによりどの年代の読者にもよりそってくれるところが魅力の絵本だと思います。つぎはどんな表情を見せてくれるんだろう?一緒にモリーの愛らしさに心射抜かれてみませんか?

(もちづき みほ／未来屋書店大宮店 書店員)



BOOK

2月の新刊図書！

童心社の絵本

きみはいっぱんの木

やまぐちりりこ／文

松成真理子／絵

定価1,980円
(本体1,800円+税10%)



きみはいっぱんの木。きみはちょうちょ、きみはもぐら。ひとつひとつに心をよせて……。

童心社の絵本

だれでもどうぞ

こどもしょくどう

カバさん

内田麟太郎／ぶん

南塚直子／え

定価1,870円 (本体1,700円+税10%)



「だれでもどうぞ」の看板を見てこども食堂にきたのは、カバ！ おばけたちもやってきて……。

絵本・こどものひろば

くろくんたちの すてきなおいかけ

なかやみわ／さく・え

定価1,430円
(本体1,300円+税10%)



「ねえ みんな！ いいものみつけてきたよ！」
くろくんがなにやらひきずってきました。

毎日絵本を読んでいる絵本好きの一歳の娘のために購入させていただきました。「おお！」「びんちゅ！」と覚えた色を、絵本を指さしながら言ってくれます。すてきな絵本をありがとうございます。
(埼玉県 E・T 三歳)



絵本・こどものひろば
くればんのくろくん
なかやみわ／さく・え
定価1,430円 (本体1,300円+税10%)

読者の声

世の中のうわさ、出来事、そういったものが一つの方向から見えている(見えていない)ことばかりでなく、同じことも他方から見ると、へえ〜とかなるほどとか、いろいろな感じ方ができるなあと思いました。一つのものを見るとときも、自分の想像や経験などで世界は広がりますね。その方がずっと楽しいな。いとつひろしさんのファンです！
(京都府 A・I 三〇歳)



絵本・こどものひろば
もしやさんといっしょ
いとつひろし／作
定価1,650円 (本体1,500円+税10%)

イラスト／平岡 瞳



あとがき

●2025年の小中高生の自殺者数が過去最多の532人と発表された。彼らの死は、私たちに無関係なことではない。彼らを絶望に迫りつめたものは私たちの中にもある。それを自覚し、彼らが自死を選ばざるを得ない現実を形作っている、人権を侵害するあらゆる暴力に、彼らが生きづらさを感じる社会のあり方に、声を上げ続けなければならない。 ㊦

●母方の実家、宮崎県諸塚村では、旧正月に鳥追い「ぜんざほっほ」が行われる。子どもだけで家々をまわり軒先を笹の葉でたたき歌う。「うちのせどやの/あわひえくうな/もぐらもっちゃほるな…」害をなすものが出ていき、来る年が豊穡になるように、と。街灯の少ない集落は闇が深い。たどり着いた家で大人に迎えられ安堵した、幼いころの記憶。 ㊦

2026年2月15日発行 (毎月刊)
童心社のひろば
第2号 (通算741号)
定価50円 (年600円/送料とも)

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話：03 (5976) 4181
03 (5976) 4402 (編集)
編集発行人：橋口英二郎
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン：坂本 梓

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。
下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただきますと、手続き完了となります。
購読料金は1年分600円(送料とも)。

